

地獄を嚙かう日光路

笹沢左保

笹沢左保

地獄を嗤^{わら}う日光路



文藝春秋

著者略歴

ささざわ・さほ 昭和5年横浜に生る。
27年より35年まで郵政省東京地方簡易保
険局に勤務。以後作家生活に入る。
著書に「破壊の季節」(文藝春秋刊)「見
かえり峠の落日」(講談社刊)など多数。

地獄を喰う日光路

昭和四十七年八月二十五日 第一刷

定価 五三〇円

著者 笹沢左保

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一一二一

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1972 Saho Sasazawa

Printed in Japan

0093—302520—7384

目次

背を陽に向けた房州路	5
月夜に吼えた遠州路	69
飛んで火に入る相州路	135
地獄を囓う日光路	199

装帧
栗屋
充

地獄を嗤う日光路

背を陽に向けた房州路

房州——安房^{あわ}の国は、房総半島のいちばん南の部分である。房州へ行くには、下総^{しもとうさ}と上総^{かづさ}を通り抜けなければならない。源頼朝の再起以来、武家支配と多くの領主たちの存亡が繰り返されて来たが、房総を南へ下るための主要な街道というものがなかった。

街道は海に沿って、五井、木更津、佐貫、保田、勝山、館山と南へ下る。木更津と保田を除いて、すべて城下町である。大きな宿場町というのは、少なかった。町人たちによって、最も盛っていたのは木更津であった。木更津は、水運の町だったのだ。

その渡世人も、木更津では足の運びを緩^{ゆる}めたようだった。思わずあたりを見回さずにはいられないほど、活気に溢^{あふ}れているのである。当時の木更津には幕府から、近在城米の運送権、江戸と房総間の渡船営業権、木更津河岸の専用権などを与えられていたのだ。

九ツ、正午をすぎたばかりだったが、すでに居酒屋には暖簾^{のれん}がかかっていた。居酒屋や煮売屋がずらりと軒を並べて、どの店にも客がいるのだった。昼間の酒でも、悪酔いしている者はいな

かった。仕事が待っているから、ゆっくり飲み食いしている暇はないのだ。

その渡世人は、並んでいる店の前をゆっくりと歩いた。どうやら、この木更津に用があるようであった。渡世人は、二十八、九に見えた。背は高いが、痩せ細っていた。整った顔立ちだが、目も鼻も頬骨も顎もすべて尖がっているという感じだった。

顔色も悪い。青黒かった。それだけに、眼差しの鋭さが異様であった。憔悴^{しやうすい}きった人間が、潤^{うる}んだ目を妙にキラキラと光らせる、そういう目をしていた。その渡世人を見れば、誰でも病人だと思ふに違いない。事実、病人なのであった。

すっかり痛んで、隙間だらけになった三度笠をかぶっていた。黒の手甲^{てうかうはん}脚絆^{かはん}に、黒鞆^{くろづ}の長脇差を腰にしている。鞆を固めている鉄環や鉄鐙^{てつどう}が、すっかり錆びていた。紺の濃淡が縞模様を描く道中合羽を引き返し、右半分を開いて背中へ流していた。

その渡世人が、ふと立ちどまった。『枯梗屋』とある居酒屋の前だった。渡世人は一瞬考え込んでから、その居酒屋の縄暖簾^かを掻き分けた。明るい路上から急に店の中へはいると、幾つかの席が設けてある土間が真暗に感じられた。

渡世人は、入口に近い席の酒樽に渡した板に腰をおろした。三度笠を、はずした。妙に静かだった。客を歓迎する女の声も、飛んでは来ない。渡世人は、薄暗さに馴れた目を店の隅に向けた。そこだけに、人がいた。その席へ、残らず人が集まっていると言ったほうがいいかもしれない。

六十すぎの男と、十七、八の娘が並んですわっている。二人とも手甲脚絆に草鞋^{わらじ}ばきという道中支度であった。男は百姓と思われるが、なかなかの貫禄で気品もあった。娘は、その孫に違

ない。旅の途中に男は酒を、孫娘は昼飯をというつもりで、この桔梗屋に寄ったのだろう。

男の前には、銚子が二、三本並んでいた。孫娘はまだ、饅飯に箸もつけていなかった。男は、青い顔をしている。孫娘のほうは恐怖のためか、顔を伏せたきりだった。その二人と向かい合つて、渡世人がひとり酒樽に渡した板の上にあぐらをかいていた。

その渡世人も道中支度だが、三度笠をかぶっても持ってもいなかった。何十日と手を入れてないらしく、のび放題の髪の毛が逆立って八方に乱れていた。ポロポロの着物の上から、道中合羽の代わりに莫蔭を巻きつけていた。

見苦しい恰好をする者の代表として引き合いに出されるほど、莫蔭にくるまった乞食渡世人が多かったのである。その渡世人も、乞食と変わらなかった。ただ一人前に、長脇差だけは持っていた。乞食渡世人は長脇差を杖代わりに立てて、その最上部に両手を重ね更に顎をのせていた。

乞食渡世人は、目の前の男を睨みつけていた。真黒な髭に被われた顔は、いかにも凶暴そうな悪相だった。唇の色が奇妙に赤く、険しい目つきは何をするかわからない男の特徴であった。その乞食渡世人の横で、二人の女が立ちすくんでいた。

この店の女主人と、小女に違いなかった。恐らく女たちに人を呼びに行かせまいとして乞食渡世人は近くに引きつけ威嚇しているのだろう。女主人のほうが、新たに店の中へはいつて来た渡世人を見て、哀願するような目つきになった。助けを求めているのだ。

渡世人は三度笠をはずしただけで、それ以上の動きは見せなかった。店の隅を、冷たい目で眺めやった。驚いたふうもなく、興味も示さなかった。月代が、大分のびている。それに髷の後ろ

に変わったものを刺し込んでいた。

平打ちの簪かんざしである。銀でできていて先端が小さな耳かきになっており、その次が銀貨ほどの円形の板、それから先が二本脚の簪であった。渡世人はその銀の平打ちの簪を、髷の後ろに斜めに刺しているのだった。

「はつきりしろい！」

不意に、乞食渡世人が大声で怒鳴った。老人と孫娘、それに二人の女がすくみ上がった。孫娘が、その瞬間に顔を上げた。色が白く、パツチリとした目が大きかった。鼻筋が通り、小さい花弁のような唇があどけなかった。繊細で、全体的に愁い顔である。

「お染さん……」

娘の顔を見て、渡世人は思わず口の中でそう呟つぶやいていた。だが、すぐ渡世人は娘から薄暗い天井へと、目を転じた。渡世人の知っているお染という娘が、未だに十七、八でいるはずはないと気づいたのであった。

「房州は大塚村の組頭で、庄左衛門とか言っていたな」

乞食渡世人が、分厚い板でできている食台をドスンと叩いた。銚子が一本倒れて、酒を散らしながら転がった。

「はい」

庄左衛門と呼ばれた老人が、慌あわてて頭を下げた。

「組頭と言え、村役人のひとりじゃねえか。村役人ともなりゃあ、礼儀というものを弁わきまえてい

るはずだぜ」

「は、はい」

「おめえのほうから、このおれに声をかけて来たんだぜ」

「どうも、申し訳ございません」

「そのくせ、どうでえ、おれの面を見て、別に用はねえとぬかしやがる」

「人間違いをしたのでございます。どうぞ、ご勘弁を……」

「勘弁ならねえ。こう見えてもな、小仏の新三郎と呼ばれて、ちっとは知られている顔なんだぜ」

「申し訳ございません」

「おめえは、この小仏の新三郎の顔に泥を塗ってくれたんだ。納得が行くように、始末をつけてもらおうじゃあねえか」

「どうしたら、よろしいんでしょう」

「十両ほど、出してもらおうか」

「十両……！」

「そうよ」

「生憎と、そんな大金を持ち合わせてはおりません」

「村へ戻りゃあ、何とかなるだろう」

「それはまあ……」

「だったら房州の大塚村まで、一緒に行ってやらあな」

「そんな……！」

「それとも、このお町とかいう孫娘を片端者かたわにされたいかい」

小仏の新一郎と名乗った乞食渡世人は、手をのばして娘の二の腕を掴つかんだ。お町というらしい娘が、悲鳴を上げながら逃げようとしてもがいた。

「おかみさん……」

入口に近い席にいた渡世人が、低い声で店の女主人を呼んだ。

「はい」

女主人はホッとした顔で、のび上がるように渡世人のほうを見た。

「あつしにも、鰻飯を食わしておくんなさい」

渡世人は言った。

「どうも、ありがとうございます」

女主人はさりげなく、乞食渡世人のそばを離れようとした。その腰の前に、乞食渡世人が足を突き出した。

「その三下さんした、見た通りの取り込み中だ。ほかの店へ行きな」

乞食渡世人が振り返って、大声を張り上げた。しかし、鰻飯を注文した渡世人は、乞食渡世人のことをまったく無視していた。

「そのめえに、茶を一杯飲ましてもれえてんですがね」

渡世人は、土間に目を落していた。

「野郎！」

乞食渡世人が、凄まじい形相になって立ち上がった。大男であった。小仏の新三郎なる大男は、肩を怒らせながら渡世人に近づいて行った。

「三下奴！ おめえ、小仏の新三郎を知らねえらしいな」

大男が、渡世人の左肩を掴んだ。

「知ってるぜ」

渡世人は、相手の顔を見ようとしなかった。表情も、変えていない。

「知っていて、このおれが恐ろしくはねえのかい！」

と男が、喚き立てた。

「恐ろしくも、何ともねえ」

渡世人の左手が、肩にある大男の手首を掴んだ。それを食台の上に引きずりおろし、同時に渡世人の右手が髷の後ろへ走った。誰の目にも触れないほどの、素早い動きだった。渡世人の右手には、平打ちの簪が握られていた。渡世人はそれを、食台の上に据えてある大男の左手の甲に突き立てた。

「わっ！」

大男が、絶叫した。一瞬のうちに、行われたことだった。大男の左手の甲に、平打ちの簪の二本脚が深々と突き刺さっていた。渡世人は、簪を引き抜いた。大男は血が噴き出した左手をかか

えるようにして、店の外へ飛び出していた。

渡世人は、土間に落ちていた大男の長脇差を拾い上げて、表へ投げ出した。それから渡世人は道中合羽の裾で、血糊を拭き取った簪を髷の後ろへ戻した。何事もなかったような、顔つきであった。ただ左手で、胸の心臓のあたりを、軽く押えるようにしただけであった。

「どうも、ありがとうございました。お蔭で助かりましたよ」

店の女主人が、胸を撫なでおろしながら板壁に凭もたれかかった。三十前後の女主人の目に、媚こびるような笑いがあった。

「おかみさんに、ちよいと訊ききてえことがあるんですがね」

渡世人は、笑いのない顔で言った。

「何でしようか」

女主人は、指先で衿元を合わせた。

「お染さんという酌女を、ご存じじゃありませんか」

「お染さん……？」

「へい。若いと言っても、もう二十三、四になりやすが……。武州は深谷の生まれで、二年めえまで下総の銚子の居酒屋で酌女をしておりやした」

「どんな器量の人なんですか」

「こんな言い方をしちゃあ失礼かもしれやせんが、そこにおいで娘さんにそっくり生き写しなんでござんすがね」